

昭和61年（1986）から書き始めた「靴の歴史散歩」も、数えて127号、連載31年余を迎えたから、ありがたいことである。

この連載によって、靴業の祖・西村勝三翁の偉業については、数多く掘り起こせたと考えているので満足している。心残りは浅草靴産業の祖・弾直樹の事績である。夢に見るほど恋焦がれていても、関係資料が出て来ないことには致し方ない。新資料の出現を期待したい。

私は、昭和22年（1947）敗戦の混乱期に叔父の経営する婦人靴メーカー「宮本製靴」に入社し、業界入りをしている。偉そうにいうが、肩書きは「見習小僧」、年も半端な19歳であった。

統制解除（昭和25年）から圧着靴全盛期へと移行する変革期に、ちょうど居合わせた年齢である。私なりの靴産業戦後史は語れるので、それをまとめて「靴の歴史散歩」の完結としたい。

入社当時の宮本製靴は、葛飾区立石に工場と本社、台東区吉野町（現・今戸2丁目）

の電車通りに卸部。小売部もあって、銀座西5丁目スキヤビル（現・ソニービルの一郭）の宮本靴店（写真1参照）と、銀座6丁目交詢社ビル前に「マキの店」のワンケースショップ。これはちょっと説明が必要だが、「土一升に金一升<sup>かね</sup>」の銀座のこと、丸丸一軒では家賃も払いきれないので、ケース単位で払い、共同店舗で経営するスタイルが多くあった。異業種でもそんなケースはあって、和菓子屋さん<sup>さん</sup>と靴屋さんが、ケースを並べて商売をしていた、という例もあった。

もともと叔父は、銀座ワシントン靴店に勤めていて、復員後独立した人だったので、銀座に店を持つということは、若い時からの願望であったようである。

婦人靴専門店だったので、女優さんでは高峰秀子さん、中村メイ子さん、SKDの曙ゆりさん、朝霧鏡子さんなどもお得意さまであった。

写真2は、昭和27年数寄屋橋交差点より朝日新聞本社と日劇を望む。（撮影は共に筆者）



写真1 宮本靴店



写真2 数寄屋橋交差点（昭和27年）